

Title	独逸の勝敗と農工立国問題
Sub Title	
Author	星野, 半六
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1914
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.8, No.8 (1914. 10) ,p.989(79)- 999(89)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19141000-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

國の間に平和の維持せらるゝことを根本の立脚地として發達し來れるものにして、諸金融機關の活動殊に割引政策の運用の如き何れも平和維持の下に於て始めて効果を發揮するを得べきや論を俟たず。隨て今回の如き空前の大戦に際會し、殊に英國自ら交戦國として戦争に参加したる場合に、諸種の狀況意想外の變調を呈し、混亂に混亂を重ねて、政府をして非常の手段に依て、之に應ずるの己むを得ざるに至らしめたるに就ては大に其事情を諒察せざる可からず。否吾輩の見る所を以てすれば、倫敦市場が數日間の非常處分に依て、一時の混亂を脱し、能く平靜の狀態に就けるは、何等か倫敦市場が他國金融市場に比較して、勝る所あることを示すものとす可く、倫敦が世界金融市場の中心たるの地位は今回の波瀾に依て、毫も動搖するの恐ありとする能はず。唯英國の官民が今回の事變に願み、歐洲大陸に異常の事件發生するも、倫敦市場をして些の微動だも感せしめざるまでに、金融上の基礎を鞏固ならしむるの用意を施すや否や、其用意の一端として、最も急なるは年來の懸案に屬する金貨準備増殖の問題に外ならざるを以て、近く之に對して如何なる解決を下さんとするやは、金融事情研究者の大なる注意を煩はす可き所なりとす。

獨逸の勝敗と農工立國問題

星野 半六

歐洲大亂の結果として將來社會の各方面に種々なる變化が生ずるであらう、只人間が死んだとか資本が減少したと云ふ計りでなく政治上に經濟上に種々なる變化が起るに相違ない、我々が特に重要なりと信ずる問題の一は獨逸の食料品供給の狀態如何に依つて農工立國論の解決が大に違つて來る事である、即ち英佛の兩國は食料品の輸入國であるが、制海權を持つて居るから供給上の心配は無いとして、獨逸は食料品の輸入國であるにも拘はらず、制海權を失ひ、特に從來の供給國たりし露國を敵として戰つて居るのであるから、其食料品の供給と戦争の勝敗との關係は經濟學者に對しても頗る興味ある問題である。

歐羅巴で穀物の輸出國は只東の露國とバルカン半島の諸國だけで西歐の文明

國は皆穀物の輸入國である、即ち英國の如きは輸入品中の最も著しき者で、穀物の需要は年々増加するに自國の農業は益々衰退して其所要穀物の大部は之を米國、露國、印度等より輸入する有様である、佛國も昔は穀物を自給して居つたが前世紀の七十年頃より不足を生じた、尤も佛國では人口は増加せぬが生活程度の上進した爲めに一人前の消費高が非常に増加したので現今では各方面から輸入して居る、獨逸も亦輸入國で米、露、バルカン諸國、埃匈、東印度等より輸入する、埃匈國では匈牙利の農業が盛になるが爲めに獨逸へ輸出して居る

輸出國としては歐羅巴では露國が第一である、其東南の地方は非常に豊饒で獨逸の輸入の大部分は此地方より来る又西歐の諸國は皆此處から供給を受けて居る、尚バルカン半島の諸國はドーナウ河の灌漑を受けて居るのでブルガリヤ、ルメニヤは著名なる輸出國である、世界の三大輸出國は露國と米國と印度で、米國は交戰國でこそはないが交戰國に食料品を供給して居るので英國を最大の得意となし、其他佛獨にも供給して居つた、印度は其大部分を英國に輸出して居る、今最近の政家年鑑に依れば歐洲諸國の食料品の輸出入は左の通りである

英本國の穀物輸入高は

Articles	1910	1911	1912	1913
Wheat	Thous £ 44,161	Thous £ 38,910	Thous £ 46,445	Thous £ 43,861
Wheat meal and flour	5,511	5,277	5,519	6,348
Maize	10,294	10,713	13,593	13,770
Barley	5,396	8,266	7,872	8,077
Oats	4,824	5,391	6,338	5,693

英國の穀物の輸出は政家年鑑に出て居らないから殆んど無しと見做す可きものである

佛國の輸出入は

Food Products	Impots (1,000,000 l.)			Exports (1,000,000 l.)		
	1911	1912	1913	1911	1912	1913
	81	72	76	29	33	33

尙穀物の輸入をフランクに示せば

	1912	1913
Cereals	366.8	613.4

獨逸の輸出入は

Agricultural Products and Foodstuffs	Imports		Exports	
	1912	1913	1912	1913
	Thous Marks	Thous Marks	Thous Marks	Thous Marks
	7,100,262	7,036,738	1,475,087	1,728,157.

昨年に於ける輸出入を各種の穀物に就て見る時は

	Imports		Exports		
	1,000 marks	Imports	1,000 marks	Exports	
Wheat	429,457	Barley	406,955	Rye	133,012
Rye	44,094	Maize	106,192	Wheat	39,368

匈牙利の穀物輸出入は

Imports	1911	1912	Exports		
	1,000 Crowns	1,000 Crowns	1911	1912	
Maize	6,905	41,578	Cereals	341,853	311,645
			Flour	261,515	272,853

露國の輸出入は

Exports	1911			1912		
	1,000 Roubles	1,000 Roubles	1,000 Roubles	1,000 Roubles	1,000 Roubles	1,000 Roubles
Articles of food	988,547	788,608	807,201			
其内 Corn, flour, buckwheat etc	735,171	546,567	589,942			
Imports	1911	1912	1913			
	1,000 Roubles	1,000 Roubles	1,000 Roubles			

Articles of food and animals	137,592	142,780	166,113
其内 Cereal crops Rice	9,172	7,459	15,579
	3,059	4,008	6,045

米國の輸出入は

Merchandise	Imports		Exports	
	1911—12 Dollars	1912—13 Dollars	1911—12 Dollars	1912—13 Dollars
Foodstuffs in Crude Condition, and food animals	230,358,230	211,458,109	99,899,270	181,693,263
Foodstuffs partly or wholly Prepared	196,100,608	194,680,542	318,838,493	320,401,482

印度の輸出入は

Food, drink and tobacco	Imports		Exports	
	1911—12 Rs	1912—13 Rs	1311—12 Rs	1912—13 Rs
	20,449,375.7	23,405,072.2	68,577,023.48	78,076,817.5

此等の表に依て聯合軍と獨逸軍の食物の供給を見るに、先づ聯合軍の方から云へば露國は食物の心配はなし英佛も制海權を有する以上は米、加、印、濠等より輸入し得るから之亦心配はないが、獨逸の方は大に事情が違ふ、埃甸の如きは輸出國とは云ひ乍ら戦時に於てドレ丈け獨逸の助けになるか頗る疑問である、獨逸は近來工業の發達と共に大輸入國となり、前に述べたるが如く其大供給者たりし露國とは交戦状態にあり且つ制海權無しとせば最も困難なる地位に立つて居る、故にブルガリヤ、ルーマニヤを味方に引き入れ様として腐心して居る様であるが彼等は獨逸軍の旗色悪しきを見て容易に立たうとしない、然らば獨逸は食物不足の爲めに敗北するのであらうか、又如何にかし食物の補充を得るのであらうか、之農工立

國問題を決するに當たつて頗る重要な事實である。

農業立國論者は農業保護の理由として種々の事實を擧げるが就中有力なるものは軍事上の夫れであつた、即ち食物を自給する事能はずんば輸出國と戰爭する事が出来ない、又他國と戰爭しても糧道を絶たれる憂があり爲めに戰爭は敗れ祖國は滅亡するであらうと主張した、乍然我々は容易に此説を信ずる事が出来ない、食料品の輸出國は澤山あるから假令戰爭が起るとも何んとか繰り合はせの附かぬ事はあるまい、又其兵力は薄弱なりとも同盟の方法に依て此難關を切り抜け得られぬ事もあるまい、若し又全然外部から供給を得られぬとすれば夫れは一輸入國が世界を敵として戰ふ時のみであらう、尤も此の如き場合には食物の供給が充分であつても到底勝利の見込はない、而して獨逸目下の境遇は丁度此想像に當てはまるので獨逸人の努力は此想像を覆すであらうか、果た又此想像をして事實ならしむるであらうか。

獨逸は此孤立を豫想してか常に獨立で活動し得る様に準備して居つた、軍資金の如きはモロッコ事件で失敗して以來切りに其蓄積に勉めた、又亂暴なる論者の

説に依れば獨逸は借金國で外國に依頼して居るが夫れは平時丈けの事で戰爭が起れば此借金を否認して仕舞ふ、尤もソナ背信行爲をすると將來資本を貸す國が無くなると心配する者もあるが、若し借金を否認し得れば最早借金するの必要がなくなる、ツマリ外國の資本で戰爭を行ひ得る、斯くなれば債務者たる事は債權國をして其債權を否認されざる様に心配させる所以で、決して債權者に依頼する弱味でない、と稱して居る、尙獨逸に於ける工業の獎勵は敢て言を俟たぬとして其原料品及び食料品をも成る可く自國で作る様にして居つた。

扱て獨逸が之から脆く敗れて仕舞へば假令食料品が有つても無くとも世界を敵として戰ふ者は負けると云ふ事になつて、濫りに農業を保護しても効能がないと云ふ結論に到着するが、假りに獨逸が從來の農業保護の爲めに食料品を全部自給し得る程度には達せざりしも而も重大なる便宜を得たと云ふ事になれば尊農論は愈々敬重され、穀物關稅を益々引上げるの必要があらう、我國に於ける穀物の不足は統計を示す迄もなく著しき事實で、之れを補はんとすれば耕地整理、耕作法の改良、肥料の改善等の方法では中々間に合はぬ、價格を引き上げるのが最も有力

なる方法である、而して關稅を引き上げれば價格は大抵上がるのである、食料品の高いのは國民の大不幸である事は何人も承知して居るが、孤立の場合に處する用意は常に爲して置かねばならぬから此不幸をも忍ばざるを得ざるに至るであらう即ちビスマルクが回想録の中に云つて居る通り、一國は他國に利益を與ふるにあらずんば他國は決して其國の爲めに働いて呉れるものでないから、國際同盟の關係の如きは何時如何に變ずるか計られぬ左れば常に孤立の用意を必要とし、又此用意あつてこそ有力なる同盟を締結し得るのであるから、農業の不自然なる獎勵も亦己むを得ざる事になるであらう

乍然食料品が高くなると困るのは敢て説明の必要もないが、我國では特に困る事がある、即ち我政府は借金政略に行き詰まつて切りに輸出の獎勵を試みて居るが、食物が高くては品物は安く出來ない、隨て輸出も發展し得る見込がない、又近頃産業の獨立と稱して工業を獎勵し新市場の開拓を計劃して居るが之れも亦生産費の關係から大打撃を蒙むる事にならねばならぬ、之を要するに獨逸が今度の戰爭で早速負けて呉るれば此點に關して敢て難問題も起るまいが、若し優勢を保ふに至るであらう

つ事になれば學者も爲政治家も茲に述べたる矛盾を解決す可き困難なる義務を負ふに至るであらう